

# 日帝の70年代総路線と対決する 革命的叛軍闘争を推進せよ！

経営学部学生会企画

中執・政経・文学部

学生会との合同企画

(P.22参照)

72年「沖繩返還」を前に入学された新入生諸君！  
そして日帝の70年代の動向を深く見つめる学友諸君に、経営学部学生会より闘う戦線への熱い連帯を求めたいと思います。

67年10月8日羽田闘争より「組織された暴力」と「プロレタリアインターナショナル」が地上で炎を燃やし、65年日韓条約以降開始された日帝の反革命侵略に対し、全学連に領導され成田・王子・エンブラ・ASPACと一連の街頭政治闘争が闘われ、その反帝の闘いは、東大闘争を頂点とする全国学園闘争の中で、すさまじい展開をみせていった。

そして学園を拠点として燃えた炎は、国家権力に近ずきつつあと一歩というところで、我々の弱さの全てを思い知らされたのであった。まさに一つ一つの火花を散らしたこれまでの政策阻止闘争が行きついたところは、日帝打倒を保障する我々の陣型と強固な組織性、主に我々の軍事の問題であったのである。

60年代階級闘争は、その様な権力打倒の質に於て総括されるべきものだったのである。その中で我々は赤軍派の如く「政治過程論」一戦術のエスカレートにもなる階級形成一から未だ抜け切れず、党二軍の形で問題を一面化させてしまう部分、そして、反動的に問題を社会革命主義的に回帰させる部分、大衆運動に全てを還元させる部分と様々な潮流を生み出したのだが、我々は、その事を武装蜂起の陣型であるところのソビエト型組織一地区共闘の建設、革命戦略の下で計画された戦術と組織的な軍隊の必要性一何よりも、革命の正規軍建設、帝国主義軍隊解体を日帝の70年代総路線である軍事外交路線に対決する叛軍闘争を軸に克ちとっていかねばならないのである。

全共闘反戦の限界性一自然発生的な自衛武装、単産、階層、そして拠点へゲモノ一的な闘いは、権力の分厚い壁の前に崩壊を余儀なくされたが、我々はむしろ新たな闘いの一歩を見出したのである。

第二回全国叛軍連絡会議に於て、我々は、解体し、あとかたもない全共闘を地区共闘へ再編するその一歩を踏み出し、70年代日帝に対決する有機

的な運動は徐々に脈を打ちつつある。

さて、御存知の通り、69年日韓条約以降資本輸出型経済に移行した日帝は、その野望を胸に我々との闘いを貫徹し、69年11月日米共同声明以来、極東に於る侵略反革命戦争に積極的に参加することを明らかにした。外交政治に於ては、もちろんその事の実体化を保障するものとして軍事再編し防衛白書に見られる徴兵制の問題、一次～三次防を合わせたより以上の四次防衛整備予算（五兆八千億円）自衛隊の強化一軍事演習、72年「沖繩返還」一安保＝反革命軍事同盟を媒介に日米共同侵略、反革命前線基地化とする一をめぐっては、自衛隊沖繩派遣、（極東の情勢に見合って、最初三千二百二名が突如六千四百名に至る）核装備のナイキハーキュリーズの買入れ、更に、それら軍事再編を右から援助するところのイデオロギー再編（教科書に於る神話復活、靖国法国会案、三島事件を利用しての愛国主義の養成、入管法一革命的在日外国人の予防弾圧、革命的組織への予防弾圧一破防法そしてまた、あのフォーカス・レチナ作戦に次ぐフリーダム・ボールド作戦一日韓米台の革命的な外交演習、それに見合ったところの社会再編etc. 攻撃は矢つぎばやにしかけられている。

だが我々は決してその動きを見逃すことなく、民族解放戦線、そしてあのベトナム戦争で燃え広かった全世界の同志と連帯し、革命的叛軍闘争を押し進めてゆこうではないか。

